



私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 62

PROFILE

東京都出身。民間企業勤務を経て、『HOTEL』で漫画脚本家デビュー。その後も、『STATION』『朝倉くん、ちょっと!』などのヒット作を生み出し、ドラマや映画などで映像化される。昨年、赤十字国際委員会(ICRC)との漫画制作企画の一環として、コンゴ民主共和国を取材。人道をテーマとした漫画『14歳の兵士ザザ』(詳細は37ページへ)の原作を手掛けた。

「アフリカのコンゴ民主共和国を取材して、人道とは何かを問い掛けるような漫画を描いていただけませんか」

赤十字国際委員会(ICRC)駐日事務所の方からこのようなお話があったのは、2年前のことです。これまで、ビジネスの現場などを舞台にした漫画を手掛けてきた私は、もっと社会に貢献できて、世界に打って出るような漫画を作りたいと常々感じていました。そんな私の思いとまさに合致し、今回、取材に行くことを決めました。

とはいっても、行き先は今も紛争が続く危険地帯。準備のために予防接種を受ける際には、何度も医師から渡航をやめるよう説得されました。開発途上国に行くこと自体が初めての私にとっては、悩んだ末の大きな決断でした。

そして昨年11月、現地で深刻な問題となっている「子ども兵士」と「紛争下の性暴力」を取材のテーマとして定め、コンゴ民主共和国に入りました。子ども兵士の更生施設を訪問した際には、現在は施設のスタッフとして働く元少年兵の

漫画で世界の今を伝える

漫画脚本家 **大石賢一**
Oishi Kenichi



男性に話を聞きました。印象に残っているのは、武装集団が子どもたちを兵士にする手口です。わざと少年だけを生かして村を全滅させ、「家族を殺した本当の敵は別にいる。私たちと共に戦おう」などと言いくるめ、銃を持たせるのです。最前線で奇襲攻撃をさせたり、スパイ行為をさせたり、大人たちが自分の身を守るために少年兵を利用しているという実態を聞き、なんて卑怯なんだろうと心が痛みました。

ICRCは、そんな子ども兵士の更生施設の運営をサポートしていました。他にも、性暴力を受けた女性に対するカウンセリング、病院の運営、物資の配付など、戦争下で被害にあった人たちに救いの手を差し伸べています。

ICRCの基本理念は、常に中立・公平であるということ。しかし、それは決して無関心ということではなく、両者の言い分を徹底的に聞き、両方の被害者を分け隔てなく救うということです。私は、その姿勢に深く感銘を受け、過酷な戦争によって被害を受けている人たちがいると

いう現実について、遠い世界だと思わずに意識を広げていくことが大切だと感じました。

今回の約2週間の取材を基に書き下ろした漫画が、『14歳の兵士ザザ』です。途上国での取材を経験し、これからも政治や国際情勢などの問題について、漫画を通じて発信したいという思いが強くなりました。

漫画には、活字だけでは伝えることが難しい現場の雰囲気や残酷さを、読み手が受け入れられる形で描き、引き込む力があります。その良さを生かし、「ジャーナルコミック」としての新たな可能性を開発していくことこそが、漫画脚本家である私が世の中のために貢献できることだと信じています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索